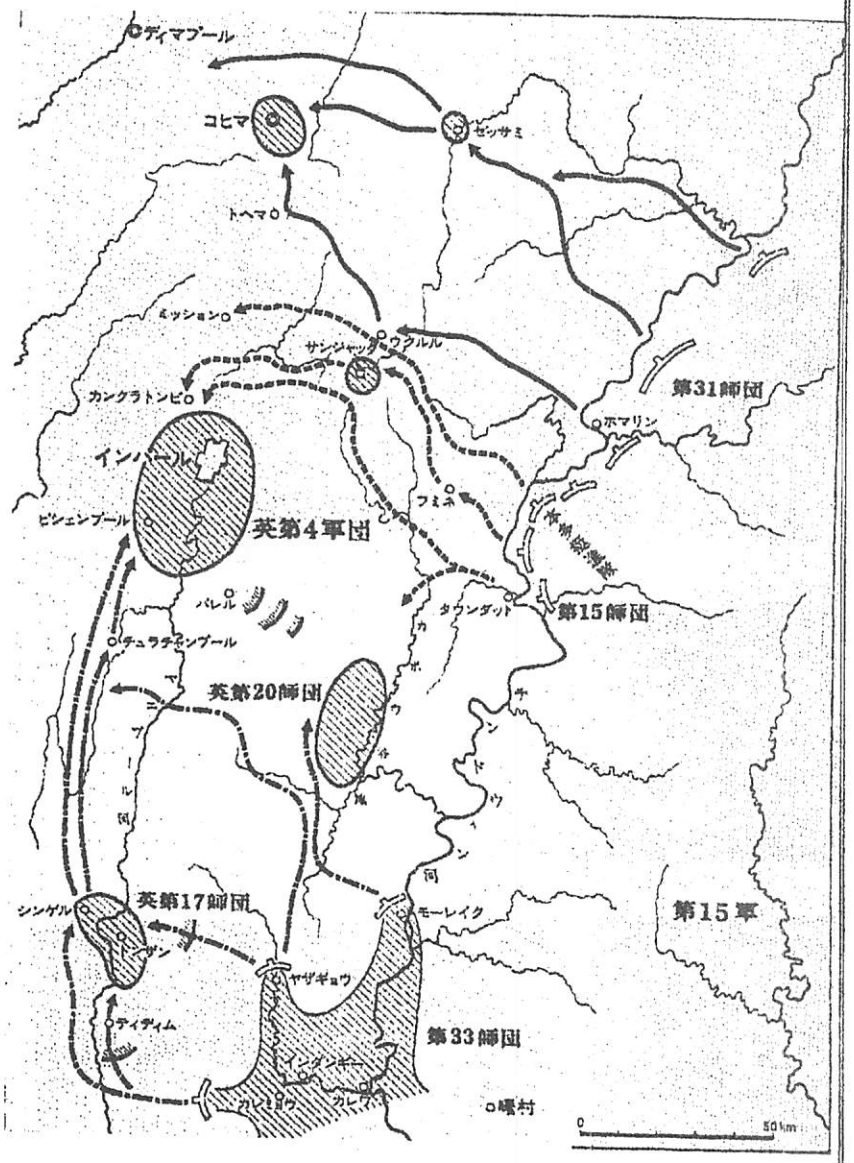
「インパール作戦」メモ



●昭和１９年３月から始まったインパール作戦

▽ガダルカナルと共に 最も悲惨な戦い

「酸鼻をきわめる」

▽第１５軍司令官 牟田口廉也中将が指揮

３個師団を中心に 約１０万の将兵が参加

進撃と攻防４か月 敗走は千キロ 5か月に

▽戦死３万人 戦傷・戦病５万人

犠牲者の多くが 戦闘で死んだのではなく

栄養失調 マラリア 赤痢で 体力を消耗し

猛烈な豪雨の中での 敗走中に倒れた

▽道の両側は 日本兵の白骨で埋まり

退却路を「白骨街道」と呼んだ

牟田口 廉也（むたぐち・れんや）

明治21（1888）～昭和41（1966）佐賀県生まれ。陸軍中将。昭和12年7月7日に蘆溝橋事件が勃発した時支那駐屯歩兵第1連隊長。予科士官学校長などを経て16年第18師団長。マレー・シンガポールを攻略、18年3月第15軍司令官。補給無視のインパール作戦を行い、多数の餓死・病死者を出した。19年8月、参謀本部付となり予備役

インパール（Imphal） ヒマラヤの尾根にあたるインド北東部、ビルマ国境近くにあるアッサム州の町。英第4軍の補給基地があり、かってはマニプール王国の首都として栄えた。

象に食糧・弾薬を積んでチンドウィン河を渡河する日本軍

ジンギスカン（Chinggis Khan）

1167～1227 モンゴル帝国創始者。モンゴルを統一し遊牧領主制を確立。西夏、金に続いて1219年以降西征を行いホラムズ・南ロシアを征服。幼名テムジン

●悲劇の第一歩は補給無視に
▽各師団の進撃距離は　１００～３００キロ
　２千㍍のアラカン山系　悪疫瘴癘の密林地帯
▽万全の補給路　輸送を確保しなければ
　成り立たない作戦
▽牟田口がとったのは「ジンギスカン戦法」
　象や牛馬で　食糧・弾薬を運び
　食べるものがなくなったら　牛馬を食べる
　インパールは敵の補給基地「糧は敵から奪え」

●「突進あるのみ」の牟田口の剣幕に引きずられた
▽反対した参謀長　３人の師団長を　更迭・解任
▽大本営も「現地指揮官が出来ると云うから、
　やって見る」　心許ない作戦発起だった

●無用な戦い、やらなくてもよい作戦だった
▽４月６日　インパール北方の要衝コヒマを占領
　大本営は　華々しく戦果を発表したが…
　外交評論家・清沢洌は「悲しむべき結果に」

「暗黒日記」(19.4.5)

印度作戦は大きな政策から見ると、悲しむべき結果を生ずることは明瞭である。かりにインパールをとったらどうするというのだ。それ以上は進めず、さればとて退けぬ。戦局の釘づけなのである。そして犠牲は非常に多いであろう。

▽連合艦隊根拠地トラック島が　２月１７日に
　奇襲され　壊滅的な打撃(航空機300機　艦船41隻喪失)
▽米軍の次の進路は　マリアナ諸島サイパン島
　日本本土は　B29の空襲圏内に入る
▽インパールに回す兵力があったら
　何をおいても　サイパン防備強化を急ぐべき
▽戦局全体にとって　必要な作戦だったのか
　陸軍首脳部の　大局観のない欠陥

●背景に、戦局を打開、敗勢挽回の「賭け」にも似た思い
▽夢は　夢を呼んで
　チャンドラ・ボース率いるインド国民軍が
　　インドに進撃すれば　反英運動が全土に爆発

「夢声戦争日記」(19.4.18)

新聞でイムパール、イムパールと大騒ぎをしているから、ビルマ明細図を出して見ると、印度東境の村落だと分る。もっと大都会だと思っていた。…戦闘が行われる毎に、新しい地名が新聞で幅を利かせるのは、面白くもあり、煩わしくもある。尻の先へ腫物が出来ても、全身の注意が一時そこに集中されるのだから、イムパールが目下、ロンドンよりもワシントンよりも幅を利かせるのは当然かもしれない。

徳川　夢声(とくがわ・むせい)
明治27(1894)～昭和46(1971)島根県生まれ。漫談家、俳優。本名福原駿雄。NHKラジオで「宮本武蔵」を朗読、話術の第一人者に。著に「夢声戦争日記」

清沢　洌(きよさわ・きよし)
明治23(1890)～昭和20(1945)長野県生まれ。朝日新聞記者を経て、自由主義者として外交・政治評論に活躍。戦中日記「暗黒日記」は貴重な現代史資料

チャンドラ・ボース(S. Chandra Bose)
1897～1945　インドの政治家。反英不服従運動に参加。国民会議派の急進的指導者としてガンジーと対立。第2次世界大戦ではドイツ・日本に頼って、反英独立運動を展開。昭和18年10月シンガポールで自由インド仮政府を樹立して主席、インド国民軍司令官に就任。インパール作戦にも参加したが失敗に終わり、敗戦後、ラングーンから東京へ向かう途中、台湾で飛行機事故死

▽大東亜会議(18年11月5日)が 東京で開かれ
　東条英機首相にも 政権維持の大きなテコ入れ
▽政略的要素が 加わったことも
　インパール作戦を 後戻りさせない要因に

●５月初めには作戦続行は無理とわかっていた…
▽予定の作戦期間「２０日間」は とっくに過ぎ
　食糧・弾薬が 底をついていた
▽牟田口が豪語していた「天長節には
　インパールを落として見せる」も 夢物語に
▽作戦中止命令を 誰が出すか
　牟田口も 上級司令部も 失敗の責任を回避
▽体面と保身「インド独立」の政治的要求が
　中止の決断を２か月遅らせ「白骨街道」に

●無謀な作戦が、どんな経緯で決定されたのか？
▽第１５軍(飯田祥二郎中将)のビルマ進攻は
　兵力が少ないため マレー作戦の進展を見て
▽シンガポール占領(17年2月15日)で
　２５軍の第１８師団(牟田口中将)を１５軍に編入
　ビルマに攻め込み ３月９日 ラングーン占領
▽ビルマ工作に 鈴木敬司大佐が「南機関」(16年2月)
　開戦と共に ビルマ独立義勇軍を編成
　２万７千人に増え アウン・サンが軍司令官に
▽東条首相は ビルマ独立を約束(17年1月)
　バー・モウを首班とする 行政府設立準備に

●南方軍に、余勢をかって「インド進攻計画」
▽スエズ運河を目指していた 独軍に呼応
　インド北東部を制圧すれば イギリスに圧力
　反攻阻止の拠点 援蒋ルート遮断にも効果
▽１７年９月１日 １５軍に「２１号作戦」準備指示
　わずか１個師団で アラカン山系越え
▽飯田軍司令官は「とても無理」
　牟田口(18師団)も「地形困難」を訴え反対
▽米軍がガダルカナル上陸(17年8月7日)
　独軍のスエズ攻勢も 頓挫
▽参謀本部は １１月２３日 作戦部長名で
　「作戦の当分保留、実施の場合でも
　１８年２月以降とされたい」と 電命

東条　英機(とうじょう・ひでき)
明治17(1884)～昭和23(1948)東京生まれ。陸軍大将。陸相を経て昭和16年10月首相。19年2月参謀総長を兼務したが戦局悪化で7月総辞職。戦後ピストル自殺を図ったが未遂。A級戦犯として刑死

参謀本部の南方作戦基本構想
まず、米英の東南アジアの軍事拠点香港、フィリピン、シンガポールを攻略し蘭印の重要資源地域を占領して長期不敗態勢を確保すること。
南方軍(総司令官・寺内寿一大将)の下に４個軍を置いた。
第14軍－フィリピン作戦
第16軍－蘭印作戦
第25軍－マレー・シンガポール作戦
第15軍－タイ・ビルマ担当

寺内　寿一(てらうち・ひさいち)
明治12(1879)～昭和21(1946)東京生まれ。長州閥寺内正毅の長男。陸軍大将。陸相などを経て昭和16年南方軍総司令官。18年元帥。戦後シンガポールで病死

アウン・サン(Aung San)
1915～1947 ビルマ独立運動を指導し、ビルマ独立義勇軍司令官、国防相。日本の敗勢で抗日戦線を指揮。英と独立協定調印後に政敵に暗殺される。現在、ミャンマーの民主化運動を進めているノーベル平和賞受賞者のアウン・サン・スー・チー女史は長女

バー・モウ(Ba Mau)
1893～1977 ビルマの政治家。独立運動を指導しビルマがインドから分離した昭和12年首相。18年対日協力政権主席。敗戦後、日本に逃れたが、帰国して野党のマハーバマ党首

▽ただ この電報は あくまで保留であって
作戦取り消しを 明確に 命じたものでなかった
何となく無期延期に 再び 日の目を見る余地

●事情が変わってきたのは、ビルマ方面軍の新設
▽１８年３月２７日 牟田口も
第１５軍司令官（ビルマ北部、中部担当）に昇格

英挺身部隊の攻撃に翻弄された

18年2月中旬、ウィンゲート少将率いる挺身部隊がチンドウィン河を渡ってビルマ北部に進入してきた。兵力は3、4千人と少ないものだったが、昼間は密林に潜伏して無線連絡により空中補給を受け、夜になると攻撃を仕掛けてきた。第18師団は東奔西走1か月、3月末に何とか撃退出来たものの、師団長の牟田口は、アラカン山系の峻険が意外に安全でないことを思い知らされた。

▽牟田口は 俄然 インド進攻計画に熱意
▽「作戦困難」と見ていた アラカン山系も
英挺身部隊を見れば 必ずしも 不可能でない
▽それなら 従来のような 守勢的防御でなく
攻勢に出て インパールを攻略すべきだ
▽ただ 牟田口は 英挺身部隊の行動は
「十分な空中補給があって 初めて可能」
この一番重要な点を 見落としていた

●「蘆溝橋事件」の個人的な心情もからんでいた
▽支那事変に拡大させる１発を 撃たせたのは
支那駐屯軍歩兵第１連隊長をしていた牟田口

牟田口はインパール作戦を説く時

私は蘆溝橋事件のきっかけを作ったが、事件は拡大して支那事変となり、遂には今次大東亜戦争にまで発展してしまった。もし今後、自分の力によってインドに進攻し大東亜戦争遂行に決定的な影響を与えることができれば、今次大戦勃発の遠因を作った私としては、国家に対して申し訳がつく。男子の本懐として、まさにこの上なきことである。

日本陸軍の体質

参謀本部は「21号作戦延期」決定に先立ち、軍参謀長会議を開いたが、15軍参謀長諫山春樹少将が「インド進攻作戦はとても困難な作戦で、アラカン山系の頂上線を占領しても、わが後方補給路は決して平易安全ではない」と報告したところ、消極的だとして更迭した。
「行け行け、どんどん」の積極論だけを良しとし、慎重論を消極的、卑怯者と見做しがちな日本陸軍の体質にもインパール悲劇の種があった。

蘆溝橋事件

北京の西側を流れる永定河にかかる全長350mの大理石の橋が蘆溝橋。橋の東側には宛平県（えんぺいけん）城があり、中国第29軍が駐屯していた。
昭和12年7月7日夜10時40分頃、支那駐屯軍歩兵第1連隊の1個中隊が夜間演習中、突然、堤防や鉄橋付近から18発ほどの実弾射撃を受けた。初年兵1人が行方不明（用便で離れ20分後に隊に戻る）になったため、報告を受けた牟田口連隊長は、大隊長の一木清直少佐（のちガダルカナルで戦死）に現地急行を命ずると共に、29軍に使者を派遣し交渉させた。
その際「不拡大方針で臨む。向こうの弁解は、こじつけでも聞いてやれ」と云っていたが、午前3時25分頃また3発撃たれると、「攻撃命令」を出し、結局はこの命令が、以後8年間に及ぶ日中戦争の発端となった。
最初の1発を撃ったのは誰か－日本側の陰謀説、29軍の発砲説、中国共産党説（翌日、蒋介石政権に抗日統一戦線を組もうと呼びかけている）など、諸説があるが、真相は謎のまま。

▽「俺はインパールを取って、大将になるんだ」
こう叫んでいた牟田口 やはり名誉欲 功名心

●「蘆溝橋コンビ」がビルマで再現
▽ビルマ方面軍司令官が
当時 旅団長の河辺正三(かわべ・まさかず)中将
「何とか牟田口の意見を通してやりたい」
▽牟田口の突出を 許すことになったのは
１５軍幕僚陣が そのまま方面軍司令部要員に
ビルマ情勢に通じている者が 牟田口だけに
▽作戦構想は 幕僚補佐を受けることなく
牟田口のイニシアティブで 杜撰な計画に

●初の兵団長会議(18年4月中旬)で、インド進攻構想
▽作戦開始は 雨季入り前後 ５月下旬
急襲的に攻撃し インパールに止まらず
ディマプールから アッサム奥深く進攻
▽軍参謀長 小畑信良(おばた・のぶよし)少将は
「補給上とても無理」田中に説得を頼んだが
統率を乱すものとして 更迭された
▽牟田口は 雨季入りで自然消滅の
作戦実現に ますます 執念を燃やす

●河辺は６月２４日、ラングーンで兵棋演習
▽南方軍から 参謀副長 稲田正純(いなだ・まさずみ)少将
大本営から 参謀の竹田宮恒徳(つねよし)少佐
▽大本営や南方軍の心配は
ビルマ南部 アキャブ方面からの反攻
▽稲田は「持てるだけの食糧弾薬で突進し、後は敵
に糧を求めると云うのは捕らぬ狸の皮算用だ」
補給の難点を指摘し
１５軍の攻撃方向にも 再検討を要請した
▽しかし 演習の結論としては
チンドウィン河西方に 防衛線を進める必要
「敵の策源地インパール攻略を目的にすべし」
▽「インパール作戦合意」には ずれ
大本営 南方軍は 南方・補給重点の 限定作戦
牟田口は 北方に重点 急襲撃破の鵜越作戦
▽竹田宮は「１５軍の考えは目茶苦茶な積極案だ」
大本営では 否定的な見方が強かったが…

第15軍
- 第31師団
  佐藤幸徳(さとう・こうとく)中将
- 第33師団
  柳田元三(やなぎだ・げんぞう)中将
- 第18師団
  田中新一(たなか・しんいち)中将

アッサムの雨季

5月中・下旬に始まり6月が最盛期。日本では1日100ミリ降れば大雨だが、1,000ミリ降ることもあり、年間雨量は1万1,300ミリ。

沛然たる豪雨はジャングルを叩き、大地を激しく打って、濁流が堰を切ったように土砂と石を運んで押し寄せてくる。水位がぐんぐん上がり、小川がたちまち多摩川クラスの川になる。15軍がまず越えなければならないチンドウィン河は、雨季には川幅が1,000㍍にも広がる。

田中　新一(たなか・しんいち)

明治26(1893)～昭和51(1976)釧路生まれ。陸軍中将。ソ連駐在などを経て昭和15年10月参謀本部作戦部長。17年12月、「東条罵倒事件」で更迭。第18師団長

東条を「馬鹿野郎」

参謀本部は、ガダルカナル戦が絶望的になった17年12月、ガ島戦継続のため船舶増徴を要求した。

東条首相が、民需圧迫で鉄鋼生産が極度に落ち込んでいることから拒否すると、作戦部長の田中は「それでも貴公は陸軍大臣か、この馬鹿野郎」と怒鳴ってしまい、重謹慎15日。更迭され、18年3月牟田口の後任として第18師団長になった。

▽方面軍参謀長 中永太郎(なか・えいたろう)少将が
　１５軍の作戦方式には「疑問が多い」と報告
▽河辺は「最後の断は自分が下すから、それまでは
　牟田口の積極的意志を十分尊重せよ」と指示
▽大本営も 現地軍の合意がある以上 無視出来ず
　実施の決断は 将来に委ねることにして
　８月７日 南方軍に「ウ号作戦」の準備命令

●牟田口は８月２５日、各師団長を集め兵棋演習
▽ビルマ北部フーコン渓谷で 重慶軍の攻撃激化
　１８師団(田中中将)は それに当たることに
▽インパール作戦は 3.1(佐藤中将)３３師団(柳田中将)と
　６月編入の 第１５師団(山内正文中将)で
▽演習は 作戦成否の検討ではなく
　実施の前提に立った 作戦計画の提示だった
▽頑強な抵抗にあった時の 対策の用意がなく
　作戦指導が 硬直化する原因に
▽山内は 手記(「新しき任務を受けて」)に 不安を書いている
　「但し其の通り実現せず、変化せらるる状況の下
　に師団の使用せらるる場合の多き予想あり」
▽田中が「補給に責任が持てるか」と疑問
　補給担当参謀は「とても責任は持てません」
▽「この困難な作戦で、補給に責任が持てぬでは戦は
　出来ぬ」田中が怒鳴りつけると
　牟田口は「本作戦は尋常では遂行できぬ。
　敵に糧を求める覚悟を持ってほしい」
　さらに「なあに、心配はいりません。敵に遭遇
　したら、銃口を空に向けて三発撃つ。そうすれ
　ば敵は降参する約束になっとる」
▽戦闘責任者の師団長が 軍司令官との意思疎通を
　欠いたまま 作戦に突入 致命的な欠陥に
▽南方軍では 稲田参謀副長が
　「作戦計画が修正されない限り認可出来ない」と
　牟田口暴走を 抑えていたが…
▽１８年１０月 稲田が転出(ニューギニア第2野戦飛行場警備隊司令官)
　南方軍も 次第に インパール作戦に傾いていく

●インパールへの決定的な流れを作ったボース
▽ボースは 亡命先のドイツから 独潜水艦で脱出
　１８年４月２８日 伊号２９潜水艦に収容

河辺の「緬甸日記」(18.6.28)

予ハ同司令官ノ心持ヲ知ル。最後ノ断ハ必要ニ応シテ予ノ下ストキアルヲ以テ、夫レマテハ、統帥ヲ紊サルヽ範囲ニ於テ其積極的意志ヲ十分尊重セヨ…予ハ直下軍司令官ヲ全幅的ニ信頼シ其美点ヲ極度ニ生カスニアラサレハ戦ハ出来ヌトスルモノ也。

牟田口と３人の師団長

牟田口は、緻密な作戦家と云うよりも果敢な行動家。外国勤務は1度もなく、本人も野戦指揮官を自負し、支那事変、シンガポール攻略と、連戦連勝に自信満々だった。

山内は陸士25期首席。米陸軍参謀学校を卒業し、駐米武官をした知性派。柳田も26期首席で何事にも理論と計算を重んずる合理主義者。航空兵力、補給を欠いた作戦に最初から疑問を持っていた。

山内と陸士同期の佐藤は、統制派の活動家。牟田口が同郷佐賀出身、皇道派総帥の真崎甚三郎大将の一の子分だったことから、「陸軍派閥」の対立感情があったと云う人もいる。

真崎 甚三郎(まざき・じんざぶろう)

明治9(1876)～昭和31(1956) 佐賀県生まれ。陸軍大将。皇道派総帥で、昭和9年教育総監となったが10年7月罷免。以後統制・皇道両派の対立が深刻化し二・二六事件に発展する。事件関係者として軍法会議にかけられたが無罪となる

山内は「軍司令官の資格なし」

15師団は中国戦線から移動したが、タイに着いたところで南方軍の命令で自動車道路建設にあたり、ビルマ到着は遅れに遅れた。牟田口は連絡に訪れた参謀に、「15師団は戦はいや

▽７月５日 シンガポール市庁舎前で
　インド国民軍１万（マレー作戦のインド兵捕虜で編成）を閲兵
▽東南アジア訪問中の 東条首相も加わり
　ボースは 東条にささやいた「閣下、三倍、
　いや五倍にわが軍を増やしたいと思います」
▽東条の心にも バラ色の夢「ボースを押し立てて、
　インドの一角に自由インドの旗を掲げたい」
▽インド国民軍は ２万の大部隊になり
　軍司令官のボースも インパール作戦を熱望
▽河辺は「この人を得た上は、インド進攻作戦は
　必ず政略的にも有効な成果をおさむべし」
▽寺内南方軍総司令官も 作戦決行の方向に

●１１月５日、東京で「大東亜会議」
▽汪兆銘（南京政府主席）張恵景（満州国総理）ワンワイ（タイ国首相代理）
　ラウレル（フィリピン大統領）バー・モウ（ビルマ首相）
　　オブザーバーとして ボースの６人が出席
▽その中で ただ一人 ボースは 日本に協力し
　戦争にも 積極的協力の態度を 見せた
▽東条にも「何とかボースの期待に応えたい」

●最後の詰めの１５軍兵棋演習（12月22日）
▽南方軍から 参謀副長の綾部橋樹（あやべ・きつじゅ）少将
　作戦決行の可否を判定し 寺内に報告するため
▽同行の参謀たちは「作戦中止」を 綾部に勧告
▽牟田口は「インパールは天長節までに、きっと
　占領してご覧に入れる」「是非断行」と強調
▽結局 綾部は 河辺の確信も確かめた上で
　「決行」の判定を下し ２８日 寺内の決裁
　「第一線軍司令官の攻勢意欲をそぐことは、好ま
　　しくない。中止の場合、軍内の混乱を懸念した」

●参謀本部は最後まで反対だったが…
▽綾部は １９年１月４日 上京して
　杉山元参謀総長に「作戦認可」を求める
　　「インパール作戦は本年２月頃開始し、長くて
　　１か月または５週間以内に終了する。その頃
　　からビルマは雨季に入り、今が好機だ」
▽作戦部長 真田穣一郎（さなだ・じょういちろう）少将は
　「ビルマ防衛は持久戦で」と 危険な賭けに反対

なのか。戦がいやだから、いつまでも
タイにいるんだろう」と怒鳴った。
　山内はこれを聞いて手記に「こんな
分らず屋の軍司令官の下に働くは潔
しとは考えられず…情もなく察しも
なく、唯自分勝手にならぬのをどな
る様な将軍は、軍司令官たるの資格
なきなり。師団としては何ともなら
ざるも、悪い上官を持ったと諦めて
将来処置する必要あるべし」。

大東亜会議

18年8月1日のビルマ、10月14日のフィリピン独立に続いて21日にはボースの自由インド仮政府がシンガポールで樹立され、大東亜首脳を招いて、政治的結集を図ろうとしたもの。
「顕著な欠席者いる」と、タイのピブン首相の名前を挙げて指摘したのがオーストラリア放送。日本の傀儡政権の代表ばかりの中にあって、唯一の正統政府はタイだったが、ピブンは国内の反日気分に配慮し、「自分が出れば日本に屈伏したことになる」と距離を置いた。病気を理由に欠席、ワンワイ殿下を代理出席させた。
　占領地の資源は、日本の物資動員計画の中に組み込まれ、「現地調達」と云う名前の日本軍の容赦ない収奪も始まっていた。バー・モウも「日本軍の物資強要はビルマの民生を虐げつつある」と日本大使館にこぼすほど、すでにきしみが現われつつあった。

連合国は勝利を確信していた

　相次いで首脳会談を開いた。18年11月22日、カイロにルーズベルト、チャーチル、蒋介石が集まり、「カイロ宣言」で日本が第1次大戦後に獲得した太平洋諸島の剥脱、満州、台湾の中国への返還、朝鮮独立を明らかにした。

▽作戦課も一貫して「今や太平洋の対米決戦に全力を結集すべきだ。ビルマに兵力分散は許されない。インパールの地形を考えると補給が困難なのは明瞭で、１５軍にその準備や確信があるとは思えない。断じて中止させるべきだ」

▽真田は ４点の疑問点を質した

①ビルマ南部に英軍が上陸してきた時インパール作戦中に対応がとれるか②兵力増加を必要とすることにならないか③劣勢な航空兵力で地上作戦に支障はないか④後方補給の心配はないか

この一言が決め手に

綾部は「南方軍は何れも確信を持っている」と答え、「この作戦は寺内総司令官の強い要望によるものだ」。杉山は「寺内のたっての希望であるならば、南方軍の出来る範囲でやらせてもよいではないか」と真田の翻意を促した。

●大本営は１月７日、インパール作戦を認可

▽東条も 同様な質問をしたが

すでに 作戦決行を決めた大本営は「問題なし」

▽方面軍 南方軍 大本営も

綿密な検討を加えた上での 決断ではなく

最後は それぞれが 人情に動かされての決定

●牟田口は２７日、作戦会議を開き作戦計画を提示

第１５軍の作戦計画

◆３月８日=第３３師団が南から攻撃を開始し、インパールの英第４軍を牽制する

◆〃１５日=第１５師団が中央から、第３１師団は北方から急襲的にチンドウィン河渡河

◆３１師団=コヒマを占領し、敵の増援を遮断

◆１５、３３師団=インパールの敵を包囲殲滅

◆初期作戦期間=２０日間

▽アッサムの雨季(5月中・下旬)から 逆算したもの

▽最初予定の ２月作戦発起 作戦期間１か月が

３月にずれ込み 期間も短縮されたのは

中央突破を図る １５師団の延着のため

▽戦力欠如 作戦開始の遅れが 第一の誤算

28日のテヘラン会談には、蒋介石に代わってソ連のスターリンが出席、ドイツ降伏後の対日参戦を約束し、代償として千島列島と南樺太領有、旅順、大連での優越的地位を要求。戦後計画を着々と立案しつつあった。

杉山　元(すぎやま・はじめ)

明治13(1880)～昭和20(1945)福岡県生まれ。元帥、陸軍大将。教育総監、陸相を経て昭和15年参謀総長。陸相再任後、20年第1総軍司令官。敗戦翌月に拳銃自殺

第１５師団はなぜ遅れたのか

中国戦線で戦っていた15師団は、南京からタイに着いたところで自動車道路建設に使われた。当時、南方軍参謀副長の稲田が牟田口に余計な兵力を与えれば暴走しかねないと、それを抑えるための措置だったとも、戦局悪化でタイ国内の動揺を心配した南方軍が、意図的に出発を遅らせたのだとも云われている。

しかも、タイから前線には1,200㌔も徒歩行軍しなければならなかった。主力の戦線参加は早くても3月15日、逆算してこの日が作戦開始ぎりぎりの線で、3分の1が未到着でも決行となった。しかし長途の行軍に疲れ、作戦準備も乏しく、戦力は半個師団にも満たなかったと云われる。

イギリス軍を甘く見た牟田口

口さえ開けば「英印軍は中国軍より弱い。果敢な包囲、迂回作戦を行なえば必ず退却する。補給を重視し、とやかく心配するのは誤りである。マレー作戦の体験に照らしても、果敢な突進こそ戦勝の近道である」。

●「急襲突破」の作戦構想、シワ寄せが攻撃力と補給に
▽問題は 後方補給に頼らずに
どうやって ２０日間の突進を 続けられるか
▽険しいアラカン山系を 登ったり下りたり
重砲など 重火器が制限され
分解して運べる 高地攻撃用の山砲程度
▽砲弾の不足も 深刻だった
１日１門３発しか撃てないのに 英軍は数千発
▽圧倒的な火力の差が 作戦失敗の大きな原因に

●机上の計算だった「ジンギスカン戦法」
▽兵隊の装備は 小銃弾２４０発 手榴弾６発
食糧は １日６合として２０日分 １斗２升
▽一説には 牛３万頭 馬２千頭 象数百頭を動員
▽牟田口は「蒙古人は野菜をほとんどとらないが、
生肉を常食としているから大丈夫なんだ」
野菜不足は 多くの脚気患者を生むことに
▽アラカン山系には 牧草が生えていない
牛馬用の飼料は 携行していないから
見る見る痩せ細り 途中で倒れるものが続出
▽弾薬・食糧の大半は そのまま放置され
歩兵用弾薬は 携行量の半分も 届かなかった
▽象は ジャングルに入る前に 引き返し
生きて 再び 河を渡って帰ってきた牛は なく
馬も 半分ほどに 減っていたと云う

●作戦が長引いた場合、後方補給の用意もなかった
▽泰緬鉄道の駅から
チンドウィン河まで １３０～１６０キロ
▽自動車輸送に 頼らなければならないが…

	１５軍の要求	南方軍の内示
自動車中隊	１５０	２６
輜重兵中隊	６０	１４

▽大幅に 減らされただけではなく
遠く シンガポールや 太平洋からの転用
とても間に合わず 実際は 紙に書いた数字

●１５軍作戦会議には、師団長は呼ばれなかった
▽牟田口は「作戦不成功の場合を考えるのは、作戦
に疑念を持つことで、必勝の信念と矛盾する」

貧弱な火力

◊31師団が九四式山砲（皇紀2594年=昭和9年採用）17門、砲弾1門150発。
◊33師団は九四式9門、砲弾1門800発。
◊15師団に至っては、連隊砲6門、砲弾各200発。山砲4門は三一式（明治31年採用）の旧式なもので、「太平洋戦争を日清戦争で戦うようなもの」だった。

牛に苦労した各部隊

ビルマの牛は、ほとんどが農耕用に使われていて日本の牛のように荷物を積んで運んだ経験がなく、日本兵も牛に触ったことさえなかった。

各連隊は250名ほどの駄牛中隊を編成して、牛に馴れることから始め、次に鞍をつけることに牛を馴らし、鞍に荷物を積んで進むことを教えねばならなかった。牛の世話に追われ、その分戦闘要員の不足となった。

泰緬鉄道

タイとビルマを結ぶ軍事鉄道。大本営は、援蒋ルート遮断と、インド進攻の際のビルマへの陸上補給路を確保するため、南方軍に工事命令を出し、17年7月5日に着工された。

工事には現地やシンガポール、スマトラなどで募集あるいは強制連行された労務者7万人と、連合軍捕虜5万5千人が投入された。映画「戦場にかける橋」でも有名になったように、険しい国境山岳地帯とクワイ河沿いの密林地帯を切り開く難工事だった。

18年10月17日に完成したが、重労働に食糧と医薬品の不足、栄養失調、コレラやマラリアなどで、捕虜1万人余り、労務者3万人が死亡、「残虐行為」として111人が戦犯の罪に問われた。

▽参謀長だけを集め 一気に 作戦決行
▽柳田は 幕僚に「大変な戦になるぞ」
山内も「対支那戦法の観念、脱せざる感あり」

●インパール作戦の３日前、重大な警報が出ていた
▽３月５日夜 英空挺部隊が １５軍背後に降下
▽第５飛行師団長 田副登(たぞえ・のぼる)中将は
「インパール作戦は中止し、この敵に当たるべきだ」 牟田口は「単なる後方攪乱だろう」
▽田副は「敵は飛行場を建設するだろう。そうなればビルマは内側から混乱し、インパール部隊への補給も完全に中絶する」
▽第５飛行師団の実働可能機数は １００機ほど
１月に 爆撃機５４機が 南方戦線に転用され
「１５軍の援護が出来なくなる」と訴えたが…
▽牟田口の作戦には 航空支援は入っていなかった
求めたのは チンドウィン河渡河の援護だけ
▽田副は ラングーンに飛んで 河辺にも訴えたが
「インパール作戦は始まったばかりだ」
▽深刻な影響は 早くも２週間後に
高松宮は 日記に「作戦の成否にも疑問」
▽増援予定の１個師団半は
空挺部隊との戦闘に かかりっきりに
▽劣勢な航空兵力も この攻撃に手一杯
インパール作戦部隊は「上空を飛び回っているのはイギリス機だけ」空からの攻撃に大打撃

●それでも初期作戦は順調に進んだ
▽３月８日 ３３師団は 南から攻撃を開始し
１３日夕 トンザン シンゲルを占領
英第１７師団を 峡谷に包囲した
▽１５日には １５、３１師団が
チンドウィン河渡河に 無事 成功し
インパール北方とコヒマを目指し 突進した
▽３３師団は 戦車を先頭の反撃に苦戦
２１５連隊長は２５日 「暗号書ヲ焼キ、軍旗ヲ処理シテ、全員玉砕ノ覚悟ニテ奮闘ス」と電報
▽柳田は 連隊に２キロ西方に撤退 退路開放を指示
牟田口に電報を打って「作戦中止」を具申
▽牟田口はカンカンになり 柳田を解任(5月10日)

「糧食二五日分の携行法」

山内は、長途の行軍に疲れている兵隊に、食糧だけは多く持たせたいと、「七日分は各自携帯 中隊は二人一組で二五瓩かつぐもの三〇組をつくり これで八日半分携行 駄馬で四日半分携行 連隊に牛二五〇頭(各頭米を積み、全体にて連隊の二日分を携行)を支給し これ (牛)を食ふことにより 三日分を代用し 計二五日分とせり」と日記に書いている。

英空挺部隊の狙い

英第4軍司令官スリム中将は、空中偵察でインパール作戦の動きを的確に掴んでいた。手薄になった15軍背後に空挺部隊を送り、ビルマ北部、中部からの日本軍一掃を狙った作戦。
まず100機のグライダーに2個旅団、9千人の兵力を乗せ、グライダーは使い捨てにして、兵器、弾薬と共に大量の築城資材を空輸した。強固なコンクリート陣地を作ると飛行場建設にかかり、さらに2個旅団を増派した。

高松宮日記(19. 3. 19)

敵空輸部隊ノ活動ニ依リ敵ハ既ニ5000ノ兵力、五箇ノ飛行場ヲ北部「ビルマ」ニ有スルコトトナリ、為ニ菊兵団(第18師団の通称)ハ完全ニ補給路ヲ断タレ、又「ウ」号(インパール)主作戦ニ対スル補給路モ脅威ヲ受クルコトトナリ、同作戦ノ成否ニモ疑問ヲ懐カルルコトトナレリ。

柳田の「作戦中止」具申電報

中突進隊の戦況意の如く進展せず、又、左突進隊方面の悲報多く、今後の攻撃極めて多難を思わしめ、約三週間を以てインパールを攻略することは絶望となれり。雨季の到来と補給

▽３１師団宮崎支隊（烈隊 宮崎繁三郎少将）は
４月６日に コヒマを占領
１５、３３師団の インパール包囲態勢も出来
「攻略は目前」に 見えたが…

●日本軍の進撃は、英軍にとっては予定の行動だった
▽４月半ばを過ぎると 制空権は完全に奪われ
猛烈な砲爆撃で 攻撃力は 急速に低下した

スリム中将の「後退作戦」

15軍背後に空挺部隊を送ると共に、15軍正面の部隊には後退作戦をとらせた。日本軍に困難なアラカン山系の山越え強いて疲れさせ、その補給路が延び切ったインパール周辺地区で、主力攻撃を加えることにした。

形の上では日本軍が包囲していても、英軍の抵抗は「円筒形陣地」を構築して頑強だった。砲兵を真ん中に置いて、その周りを戦車、重火器で固めた防御陣地を蜂の巣のように配置した。陣地同士は無線で連絡を取り合い、上空にはひっきりなしに飛行機が飛んできて、攻撃、補給に当たった。

▽牟田口は「４月２１日インパール総攻撃」を決意
１７日 佐藤３１師団長に
宮崎支隊の１５師団増強を 命じたが
佐藤は「兵力抽出不可能」と拒否
▽牟田口は ２９日 抽出命令を撤回
この日は「天長節まで占領」と 豪語していた日
▽日本軍戦力は ４０％前後に低下
弾薬補給もなく ただ 消耗を重ねるだけに

●愕然とさせた方面軍参謀の前線視察報告
▽南方軍 ビルマ方面軍も 参謀を前線に派遣せず
インパールの実状を知らないまま 楽観
▽参謀次長 秦彦三郎（はた・ひこさぶろう）中将が
南方各地の視察に来て 初めて
方面軍補給担当参謀 後勝（うしろ・まさる）少佐を派遣

後少佐３０日、こう報告した

「彼我の戦力、補給能力、敵軍の抗戦意欲などを考えると、敵軍の自主的降伏、または退却と云うの困難は、悲惨なる結果を招来するに至るべし。

我編成装備は極めて劣弱にして、敵に比し総合戦力不十分。徒に人的消耗を来し、今やインパール攻略は不可能に近く、仮令、之が攻略成るも爾後の防御困難なり。

ゆえに、インパール作戦を中止し、現在占領しある地域を確保し防御態勢を強化すべきである。

宮崎　繁三郎（みやざき・しげさぶろう）

明治25（1892）～昭和40（1965）岐阜県生まれ。陸軍中将。歩兵第26旅団長を経て昭和18年31師団歩兵団長。失敗の連続だったインパール作戦の中で、見事な戦いで「名将」と云われる。

宮崎がとった戦術

日本陸軍の伝統的な戦法は「白兵突撃」だったが、宮崎はそんな画一的な戦術はとらず、兵の特技で戦わせた。手榴弾投擲の得意な兵には手榴弾だけ、射撃が得意なら銃と弾丸だけを持たせ、銃剣術が優れていれば、そのチャンスを生かす配置をした。

糧食欠乏がじわじわと

コヒマでは1面のテニスコートを挟んで、4、50㍍の間に両軍が対峙した。話し声も聞こえるし、朝には朝食の匂いがプーンとして空きっ腹にこたえた。わずかにありついたのが、空からの「敵さん給与」だった。

英軍輸送機がパラシュートで補給物資を投下したが、第一線が余りにも近過ぎたためかなりの量が日本側に落下した。茶色の麻袋を開けると、1斗カンが4個。その一つずつにパン、ミルク、タバコ、缶詰にチョコレートからブランデーまでぎっしり。

奇蹟が起こらぬ限り、攻略は不可能である。補給と雨季の状況を考えれば、作戦遂行の限度は五月末までである。故に、一応全力をあげて攻撃を続行するが、事の成否に拘らず、五月末には作戦を終了することが肝要である」

▽作戦課作戦班長 杉田一次(すぎた・いちじ)大佐には
　意外な話だった 河辺方面軍司令官は
　「牟田口に任せておいて大丈夫」と云っていた
▽杉田は 後少佐に 細かく質問した後
　参謀本部に「インパール作戦危機」を打電

●秦参謀次長は５月１５日、陸軍首脳会議で報告した
▽「インパール作戦 成功の公算は
　逐次 低下しつつあり」
▽杉田の実感は「もう とてもダメだ」
　突然 ショックを与えてはと云うので
　婉曲な表現に「作戦中止」の含み
▽東条参謀総長は 激怒した
　「どこが不成功なのか、何が悲観すべきことがあるのか」と 秦に詰め寄り
　「若年の一参謀の報告を信じて帰ってくるとは何事か」と 満座の中で 叱りつけた
▽東条は 河辺に
　「インパール作戦は今や世界的問題なり。ビルマ方面軍はインパールを攻略すべし」と指令
▽東条の積極論 作戦継続の表明は
　１５軍を督励し 苛酷な戦闘を 強いる結果に

●インパールの雨季は例年より早くやってきた
▽山内１５師団長は 日誌に書いた
　「第一線ハ撃ツニ弾ナク今ヤ豪雨ト泥濘ノ中ニ傷病ト飢餓ノ為ニ戦闘力ヲ失ウニ至レリ。第一線部隊ヲシテ此ニ立チ至ラシメタルモノハ実ニ軍ト牟田口ノ無能ノ為ナリ」
▽佐藤３１師団長も 田副飛行師団長に打電した
　「弾一発、米一粒モ補給ナシ、敵ノ弾、敵ノ糧食ヲ奪ッテ攻撃ヲ続行中。今ヤ頼ミトスルハ空中ヨリノ補給ノミ。敵ハ糧食弾薬ハモトヨリ武装兵員マデ空中輸送スルヲ眼前ニ見テ只々慨嘆ス」

日本軍は焼き米に岩塩。それさえなくなって、兵隊は牟田口が「食欠乏せば敵を蹴散らして、これを取れ」と云っていたのを知っていて、「冗談じゃねえ。てめえがここまでやってきて蹴散らしてみろってんだ。無駄口ばかり叩きやがって」と怒ったと云う。

高松宮日記(19.5.5)

陸軍デハ「インパール」作戦ノ報導ヲ薄クシ、支那河南作戦ノ報導ヲ以テ打消スベク方針ヲ決ス。

南太平洋での玉砕続きを打ち消すため、連日、派手に新聞紙面を賑わせてきたインパール報道はこうして次第に姿を消していく。

参謀総長も兼務した東条

東条は19年2月21日、首相、陸相兼務のまま参謀総長に就任、嶋田繁太郎海相も軍令部総長を兼務した。

軍の作戦には、首相といえども口出し出来ず、戦局悪化で「国務と統帥を一体化させる必要がある」との措置。異常とも云うべき権力の集中は、陸軍部内でさえ「東条幕府」とか「権力亡者」と評判の悪いものだった。

三笠宮に云っているようだった

陸軍首脳会議には、参謀本部参謀の三笠宮少佐も同席していた。戦争指導班・種村佐孝大佐は「大本営機密日誌」に「総長はすぐ前の席の三笠宮に対していっているようでもあった」と書いている。東条にとってインパール作戦成功は 、唯一と云ってもよい光明だった。三笠宮の口から天皇の耳に入り、戦局悪化で天皇の信頼を失い、政権維持が難しくなるのを恐れたと云うのだ。

●佐藤は６月１日、宮崎に殿を任せ「独断撤退」を開始

３１師団と１５軍の電報

5月25日 佐藤発「師団ハ今ヤ糧食絶エ山砲及歩兵重火器弾薬モ悉ク消耗スルニ至レルヲ以テ遅クモ六月一日迄ニハ『コヒマ』ヲ撤退シ補給ヲ受ケ得ル地点迄移動セントス」

31日 軍参謀長発「貴師団ガ補給困難ヲ理由ニ『コヒマ』ヲ放棄セントスルハ諒解ニ苦シムトコロナリ、尚十日間現態勢ヲ保持サレタシ…断シテ行ヘハ鬼神モ避ク 以上依命」

31日 佐藤発「軍参謀長ノ電確ニ諒承セリ、然シ軍ハ我ガ師団ニ自滅セシムル意味ニハ解セス、コノ重要方面ニ軍参謀ヲモ派遣シアラサルヲ以テ補給皆無、傷病者続出ノ実状把握シ居ラサルモノノ如シ、状況ニヨリテハ師団長独断処置スル場合アルヲ承知セラレタシ」

▽佐藤は「補給無視を責める」と云う名のもとに
「命令拒否」の決意を示すため 無線封止
１５軍との連絡を 断った
▽牟田口にも 軍司令官の体面にかかわる問題
２日「師団主力は補給を受けた後、１５師団と連携し、インパール攻撃の準備をせよ」と命令
ウクルル（コヒマから70㌔）までの後退を 追認

●作戦決定以上に無責任だった「中止」の決断
▽河辺は ５月３０日から 前線視察
６月６日 戦闘司令所に 牟田口を訪ねた
「もし牟田口が作戦中止を進言するなら、
それを承知する気持ちでいた」
▽牟田口は 何度か 口まで出かかって
躊躇する様子は 見せたものの
病弱の山内（15師団）更迭 兵力増加の要望だけ
▽ハラの探り合いに終始し 河辺は帰途に
▽「もうダメだ」と わかっていながら
二人とも「敗北」を 口に出す勇気がなかった
▽佐藤は ウクルルにも 糧食がないとわかると
軍の補給点 フミネに向けて 退却を続けた
▽６月２２日 コヒマ・インパール街道が突破され
敵戦車が 続々と インパール盆地に進入

兵隊は「コヒマ戦記」を歌った

昼は飛行機 夜は迫（砲）
雨と降りくる 弾の中
今日も出て行く 肉攻班
お国のためとは いいながら
ほんとに ほんとに ご苦労ね
雨のアラカン どこまでも
担架かついで さまよえど
米の補給は さらになし
糧を求めて 移動する
ほんとに ほんとに ご苦労ね

陸軍刑法では死刑に当たる罪

第42条 司令官敵前ニ於テ其ノ尽スヘキ所ヲ尽クサスシテ隊兵ヲ率ヰ逃避シタルトキハ死刑ニ処ス

これまで、個人の戦線離脱や小部隊がはぐれて任地を離れたことはあったが、戦略単位の師団が、一体となって戦線を離脱したことは日本陸軍始まって以来の不祥事だった。

二人は述懐している

牟田口「私は河辺将軍の真の腹は、作戦継続に関する私の考えを察知すべく、脈をとりに来たことを十分承知したが、どうしても将軍に吐露することが出来なかった。私はただ、私の風貌によって察知して貰いたかったのである」

河辺「予の瞼には鬼気ただよう陰雨の下、陣頭に立つ我が将兵、ことにパレル戦線で握手したインド国民軍将兵の顔が彷彿としてやまぬ…若し冷静にこの戦況を客観することが許されるならば、この時既に予は作戦中心の決心に出たであろう。しかし、この作戦には私の視野以外にさらに大きな性格があった。なんらか打つべき手の一つでも残っている限り、最後まで戦わねばならぬ。そしてチ

▽牟田口は 翌日 河辺に
「情状酌量ノ余地ナシ、佐藤ヲ召喚シ、軍法会議
ニカケテ厳重ニ処断セヨ」と 電報
▽２６日 軍参謀長 久野村桃代(くのむら・とうだい)少将が
方面軍に「中止具申」の文案を 作成すると
牟田口は 何も云わずに決済し 打電させた
▽大本営には ３０日 南方軍から
「インパール作戦ハ逐次コレヲ抑制スルノ要
アルヤモ知レズ」及び腰ながらも 中止要請

●東条は７月１日、「作戦中止」を上奏し裁可を得た
▽中止命令は ５日 牟田口に伝達
佐藤罷免も この日 発令されたが
「牟田口と、河辺と、南方軍と、大本営と
バカの四乗なり」と 云ったと云う

●作戦は中止されても、悲惨な撤退は続いていた
▽マラリア 赤痢 そして 飢えに喘ぐ 兵隊たちは
豪雨の中 三々五々と 長蛇の列を作り
泥濘の道を よろめきながら 歩いた
▽英軍の爆撃 戦車に追われ
山道にハシゴをかけ 木の根を伝って 逃げた
鉄砲は捨てても 飯盒だけは 手放さなかった
▽道端には 行き倒れの兵隊が 増えていった
虚ろな目を 見開いたまま 群がる蠅を
追い払う気力もなく 忍び寄る死を待つだけ
▽夢遊病者のように 寄ってきて
「兵隊さん、お願いです。米を…」と すがる
兵隊が 兵隊を見て「兵隊さん」と云う

●大本営は８月１２日、「インパール戦線整理」と発表
▽河辺と牟田口は ３０日付で 参謀本部付に
▽山内１５師団長(6月10日解)は ８月５日に病死
▽佐藤については 河辺は 医師に
「急性精神過労症」と 診断させ
大本営も「苛烈な戦局下における精神錯乱」
不起訴にして 予備役(11月24日付)
即日 召集して スマトラの軍政顧問に
▽一見「温情的」ともとれる この措置は
「陸軍全体の名誉」を 重んじた結果だった

ャンドラ・ボースと心中するのだ、と予は自分に言い聞かせた」

悲惨な「白骨街道」

丸山静雄(朝日新聞記者)は「インパール作戦従軍記」に書いている。爆音が聞こえて、橋桁の下に駆け込むと、兵隊が一人寝ていた。敵機が去って「ホッとして、わたしは傍の兵隊を見た。おやっ、白骨の兵隊だった。なるほど戦闘帽をかぶり服を着、靴をつけている。しかし、つけているのは白骨だった。頭蓋骨が戦闘帽をかぶり、白骨の手が手袋をはめ、白骨の足が靴をはいているのである」

「死体はポツンと、ただ一体だけ横たわっているようなことはなく、一体の死体があるところには数十の死体が続いていた。… 人間は孤独であるとか、孤独を愛するなどというが、やはり一人ぼっちでは死ねないのであろう。よく見ると、死体の横たわっている側はやや高く、山径に面して勾配があり、あたりにはあまり樹木がなく、比較的明るくひらけていた。…濃密なジャングル内の薄暗く、ジメジメした地域や湿地帯にはあまり死体はなかった。やはり、こざっぱりした少しでも美しいところで最後は息を引きとりたかったのであろう」

大本営発表(8月12日午後5時30分)

緬甸方面目下の戦況次の如し。
中部印緬国境方面 コヒマ及インパール平地周辺に於て作戦中なりし我部隊は八月上旬印緬国境付近に戦線を整理し、次期作戦準備中なり。

▽しかし 佐藤の「独断撤退」は
他の２個師団が 側背から 攻撃を受け
友軍将兵の犠牲を 倍増させることに

●インパール作戦失敗は、ビルマ防衛の破綻を招いた
▽フーコン峡谷でも 雲南でも 反撃が始まり
日本軍は 敗走を重ねなければならなかった
▽これを見て 国防相アウン・サンは
秘かに 抗日勢力を集めて
「反ファシスト人民自由連盟」を 結成
▽傀儡政権の実態に「亡霊のようで
猿芝居みたいな独立。幻想に過ぎない」
▽敗北が決定的の日本と 組むわけにはいかない
２０年３月７日 ビルマ国軍出陣式で
兵士たちに「最も近くの敵と戦え」
１７日 国軍と地下組織は 抗日に一斉蜂起
▽戦後は 独立に向け イギリスと交渉
悲願達成が半年後に迫った ２２年７月１９日
政敵に暗殺された ３２歳だった
▽インド国民軍も 大打撃を受けた
ビルマまで辿り着いた兵士は 約２千人
▽ボースは ８月１８日 東京へ向かう途中
台北で 搭乗機が墜落し死亡 ４８歳だった

●日本では、インパール作戦中止２日後の
１９年７月７日 サイパン島が陥落し
東条内閣は 総辞職に追い込まれる

防衛庁の記録によると

	残存兵力	損耗率
３１師団	約５，０００	６７％
１５師団	約３，３００	７８％
３３師団	約２，２００	８４％

こんなひどい将軍もいた

山本支隊は、33師団の北側からパレルを目指したが、戦車30台、重砲18門の15軍唯一の「火力突進隊」だった。インパールへの進攻ルートでここだけが舗装道路が通じており、火力、機動力を集中して強行突破を狙った。

しかし、支隊長の山本募（やまもと・つのる）少将は、尾根の陰に石で何重にも囲った横穴式の壕を司令部にして籠もったまま。丸山記者が、山本が外に出たのを見たのは上級の将軍が視察に来た1回だけだったと云う。理由として「将と云うものは、血を目にすべきではない。それによって憐憫の情を起こし、指揮統率にためらいが出るようなことがあってはならない」。将兵は飢えているのに、4人もの食事係がついていた。

それでいて、部下に対する命令は峻烈で、一度攻撃を命じると、目標の陣地を奪取するまで同じ部隊に何度も攻撃を命じた。失敗すると司令部に呼び付けられ、兵隊たちが「反省のテント」と呼ぶようになった、小さな薄暗いテントに何日も静座して反省させる。そして「最後の突撃」を命ぜられ、悄然と前線に戻っていった。

山本は、無事日本に戻り、20年4月に中将に昇進、第214師団長に。

4/39

「インパール作戦」関係年表

昭和12	1937	7. 7 蘆溝橋事件勃発。支那事変始まる
14	1939	9. 1 第二次世界大戦始まる
15	1940	9.27 日独伊三国同盟、ベルリンで調印
16	1941	2. 1 大本営、ビルマ工作の「南機関」設置
		6.22 独軍、ソ連に侵攻。独ソ戦始まる
		10.18 東条英機内閣発足
		11.16 大本営、南方軍の戦闘序列発令。総司令官に寺内寿一大将。タイ・ビルマ担当の第15軍(飯田祥二郎中将)編成
		12. 1 御前会議、対米英蘭開戦を決定
		12. 8 太平洋戦争始まる。真珠湾攻撃。第25軍マレー半島上陸、第15軍タイ進駐
		12.12 閣議「大東亜戦争」の呼称決定
		12.25 香港占領
		12.28 ビルマ独立義勇軍、バンコクで編成
17	1942	1. 2 マニラ占領
		1.21 東条首相、議会で「大東亜経営方針」を宣言。フィリピン、ビルマに将来独立を与え、マレー、香港は日本が確保
		2.15 シンガポール占領(17日「昭南島」と改称)
		3. 4 第18師団(牟田口廉也中将)15軍編入
		3. 9 ラングーン占領
		4.18 米爆撃機、日本本土初空襲
		5.13 バー・モウ脱獄、日本軍憲兵隊が救出
		6. 5 ミッドウェー海戦。主力空母4隻喪失
		7. 5 泰緬鉄道建設始まる(18年10月17日完成)
		8. 7 米軍、ガダルカナルに上陸開始
		8.11 南方軍、インド進攻計画(21号作戦)を大本営に提出
		9. 1 南方軍、15軍に21号作戦の準備指示♦シンガポールでインド国民軍編成
		11.23 大本営、21号作戦の実施保留を通達
18	1943	2. 1 ガダルカナル撤退開始(7日完了)
		2. 8 英挺身旅団、北ビルマに進入
		3.27 ビルマ方面軍(河辺正三中将)を新設し、第15軍司令官に牟田口昇格
		4.18 連合艦隊司令長官山本五十六戦死
		4.28 伊29潜水艦、インド洋南方で独潜水艦と会合、チャンドラ・ボース収容
		5.26 15軍参謀長・小畑信良少将更迭
		6.17 中国戦線の第15師団、15軍に編入
		6.24 ビルマ方面軍、インド進攻兵棋演習
		7. 5 東条首相、シンガポール市庁舎前でボースとインド国民軍を閲兵
		8. 1 ビルマ独立。軍司令官にアウン・サン
		8. 7 南方軍、大本営指示に基づき方面軍にインパール(ウ号)作戦の準備命令
		8.12 方面軍、15軍に作戦準備要綱示達
		8.25 牟田口、兵団長会議で作戦計画提示
		9. 8 イタリア無条件降伏
		9.25 大本営、「絶対国防圏」を決定
		10.14 フィリピン共和国、独立宣言
		10.21 自由インド仮政府(主席、国民軍司令官ボース)、シンガポールで樹立
		11. 5 大東亜会議、東京で開催(6日共同宣言発表)
昭和18	1943	11.22 米英中首脳がカイロ会談
		11.24 ギルバート諸島マキン島守備隊玉砕
		11.25 タラワ島の日本軍守備隊も全滅
		11.28 米英ソ首脳、テヘランで会談
		12.22 第15軍司令部で兵棋演習
19	1944	1. 7 参謀総長指示でインパール作戦認可♦自由インド政府、ラングーン進出
		1.15 南方軍、インパール作戦実施を命令
		1.27 15軍で各師団参謀長を集め作戦会議
		2. 5 マーシャル諸島の日本軍守備隊全滅
		2.11 牟田口、各師団に攻撃命令
		2.17 米機トラック島空襲、基地機能壊滅
		2.21 東条首相、陸相兼任のまま参謀総長。嶋田繁太郎海相も軍令部総長兼任
		3. 5 英空挺兵団、15軍背後に降下♦田副登第5飛行師団長、牟田口、河辺に「インパール作戦延期」を進言、聞き入れず
		3. 8 第33師団(柳田元三中将)南から進撃開始。インパール作戦始まる
		3.13 シンゲル占領、英第17師団を包囲
		3.15 第15(山内正文中将)、第31(佐藤幸徳中将)師団、チンドウィン河を渡河
		3.25 英印軍猛攻で33師団苦戦、柳田は「退路開放」指示。牟田口に作戦中止具申
		4. 6 第31師団宮崎支隊、コヒマ占領
		4.17 牟田口、31師団にインパール総攻撃のため宮崎支隊抽出命令。佐藤拒否
		4.30 前線視察の方面軍参謀、苦戦を報告
		5.10 柳田33師団長解任
		5.15 南方視察の秦彦三郎参謀次長、「インパール前途多難」と報告、東条激怒
		5.25 佐藤31師団長、15軍に「コヒマを撤退し補給可能地点に移動」と打電
		6. 1 佐藤、コヒマを放棄し独断撤退開始
		6. 6 河辺、牟田口、15軍戦闘司令所で会談♦連合軍、仏ノルマンディに上陸開始
		6.10 山内15師団長解任(8月5日、戦傷病死)
		6.15 米軍、サイパン島上陸開始
		6.22 英印軍、コヒマ-インパール街道突破
		6.26 牟田口、方面軍に作戦中止要請電報
		7. 1 東条参謀総長、天皇に「インパール作戦中止」を上奏し、裁可を得る
		7. 2 南方軍、方面軍に作戦中止を命令
		7. 5 方面軍、15軍に作戦中止命令伝達♦佐藤31師団長罷免(11月24日付で予備役編入)
		7. 7 サイパン島守備隊玉砕し陥落
		7.18 東条内閣総辞職(小磯国昭内閣成立)
		8.12 大本営「インパール戦線整理」と発表
		8.30 河辺と牟田口更迭、参謀本部付に
		10.20 米軍、フィリピン・レイテ島上陸
20	1945	3.17 ビルマ国軍、抗日に一斉蜂起
		4. 1 米軍、沖縄本島に上陸
		8.15 敗戦
		8.18 ボース、台北で飛行機事故死。48歳
22	1947	7.19 アウン・サン、政敵に射殺さる。32歳